〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(15)〉

TURKISH DELIGHT (1)

―トルコ視察・印象編―

菊地知子

視察の概要

二〇〇七年八月、お茶の水女子大学幼保プロジェクトメンバーである私たち塩崎と菊地は、トルコへの視察の旅に出た。イスラム国中唯一、信教の自由を有し、EU入りを悲願とし、古くから幾多もの文明の開けた土地柄。愛他性が非常に高いといわれる国民性。百パーセントの食料自給率。そして子どもは着実に増えている、そんなトルコにおいて、一体子どもはどのように育っているのか。人々は子どもにどのようなまなざしを向けているのか。どうやら、私たちが身を置いている社会の枠組みからは見えない、それゆえ、非常に示唆的な知が保障され展開されているのではないか。はた目からは、不安定さや緊張度の高さが映ることの多い国情の中、急展開する教育制度改革の実態に触れその功罪を読み解く必要性もさることながら、私たちはともかく、子どもの生きる姿に出会ってくることを第一義に、トルコを目指した。

同時期に視察したイギリスについての報告は別の場に譲ることとし、本稿では、トルコにおける

フィールドワークでの見聞を基に、筆を進めていく。

私たちは、性格の違う主に二つの都市において、街角、公園、学校、病院などで出会う子どもや子連れの人々を観察・記録し、必要に応じて聞き取りをした。また、二人の乳幼児の子どもをもつ父親と、大学生の息子が二人いる母親への子育てについてのインタビューを行った。そのほか適宜、かかわり得た人々に対し、子どもへの思いや、かかわり方などについて聞き取りをした。

イスタンブールにて
――大人は子どもとどうつながり得るか

トルコ最大の都市イスタンブールは、国の西端に位置し、市街地に八八〇万（イスタンブール全県ではおよそ千二百万人）の人口を抱える大都市である。日本の二倍以上の面積をもつ東西に長いトルコ全体の人口は七千数百万人程度で、一都市にかなり集中している。

人口増加の曲線は、かつてよりはかなり緩やかになってはいるものの、トルコでは子どもが生まれ続けている。そして、人口が過度に集中する都心部においても、日本のようにある年齢層だけが極端に多いような人口分布ではおそらくなく、子どもの多さが人の多さに比していることが、旅人にも実感し得る。そのくらい、至る所に子どもの姿があった。そんなイスタンブールで垣間見たものは、たとえば〇歳から二歳だとか、三歳から五歳とか、あるいは何歳までを子どもと呼ぶかなど、人為的な区切りや決め事の一切が果たして意味を成すのかどうかを疑いたくなる。あるいは、ともかくいったん保留にしておきたくなるような、世代や年齢の連続性の中を人々が生きている、ということであった。

非常に印象的だったのは、逆説的だが、出会わなかった場面についてである。たとえば、二歳という時代を生きる子どもが、二歳らしく生きようとするがゆえに周囲の大人との間に（日本でなら）ほぼ例外なく生じる、子どもの自我と大人の我執とのぶつかり合いの類である。

主には、親である大人が、こと二歳を前にするとき、さまざまな「ねばならぬ」ことが、二歳の子どもの、今ここでの楽しみや今ここでの欲求にクギを刺し、対立する。大人は、あたかも予見し得るもののように未来をとらえ、子どもの今ここでの気持ちに対峙し、未来に向けて今の姿を矯正しなければならないように思い込む。たとえば、「そんなことをしていると」とか「さもなくば」などと、子どもを脅したり賺（すか）したりあるいは「条件によっては愛さなくもないが条件によってはここに置いて帰る」といった類の言動をしがちであることは、自分自身の子育てを振り返ってもかなり明らかである。

ところがトルコでは、そのような場面にはついに出会わなかった。二歳は、禁止や抑制やとがめ立てがなくても、自然裡に平穏裡に、次なる年齢に移っていくこととされている。そして、傍らの大人もその連続性のただ中に在ることを、距離的にも気持ち的にも近くにいるさまざまな世代の人の存在をもって、自明のこととしてあるのだろう。それに対し、今のうちに矯正しておかないと、この先とんでもないことになるのではないかという（実のところ論拠に乏しい）不安感は、日本では残念ながらとても強いように思う。私の感じたトルコの人たちの素朴さと控えめな自信は、人との潤沢なかかわりの中にこそ自らが生かされて在る、ということに支えられているのだろう。それは時に、子どもとの関係に緊迫感や気

迫、切実さが欠けているということと同義であるのかもしれないが。

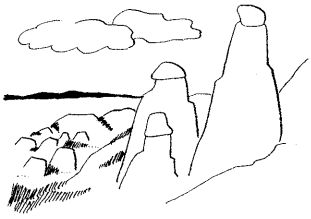
地方小都市にて
―人は自然(世界)とどうつながり得るか

さて、私たちは、トルコ近代化路線を一手に引き受けている感のあるイスタンブールを見るとともに、地方の小さな町も訪れることにした。地方での子どもたちの姿を見ずにトルコの子育て事情、教育事情を語ることは、片手落ちも甚だしいと言わざるを得ない。地方にこそ、子どもも含めたこの国に生きる人々の姿が、社会的背景も感じられつつ、つまびらかになると考えもし、指摘もされたためである。

そうして訪れた中部アナトリア地方にある町、ユルギュップの空は、吸い込まれるほどに深く青かった。

トルコで出会った人々が総じてそうであったように、その小さな町で出会った四人の少女たちは、私たちの求めに応じて嬉々として被写体となり、質問に対しても、ふっと心配になるくらい従順に、明るく応じてくれた。月並みな表現はいささか不本意ではあるけれど、撮った写真を見て、その四人を包むように広がる空の深い青さに、私は心底驚いたのだった。しかもトルコにいる間は、そのような空を当たり前と思って一度たりとも仰ぎ見ることもなかった。

空の下にいれば、人もまたその空をも含めた自然世界の移り変わりの中で、ささやかに変容を余儀なくされながら生きているはずである。しかしまた、たとえば何千年何



万年もの時をかけて変容してきた奇岩巨岩の、その変わらなさを旨とするがごとき変容の中では、時刻ごとや一日ごと、季節ごとの移り変わりもが地球規模宇宙規模において実に慎ましいものであることも実感する。その下でさらに小さく小さく生きる自らを、それなりに多くを背負おうとしているという現実の中に見て、いとおしくさえ思うのだった。

日常的に空のあの青さに触れ、そこにそうして空が変わらずあることへの信頼と揺るぎなさを感じるとき、その下に生かされていることへの謙虚さと安心感をもち、自分の心にも青空をもつことができるのかもしれない。そして、人の言を何のひねりもなく、そこに包み込み吸収するがごとく受け入れ、私たちのような旅人の質問にも、斜に構えることも出し抜くこともなく、ただただ従順に、応えようとするのかもしれない。人は皆どこかに、自分の青い空をもち、その高さや青さ広さ、そして深さを、実感しなければいけないのではないか、とふと思った。

トルコと日本にて　―私たちは人とのつながりをどう生きているか

今回、今まで触れることのなかった空気に肌で触れ、たくさんの子どもに出会い、たくさんの、子どもに近しく生きる人たちに出会ってきた。全幅の信頼をおいて送り出してくれた、リーダーはじめ、プロジェクトの人たちの存在は大きい。羨望さえも抱いて見つめたトルコの人たちの応答的なやりとりと同じものを、日本の非常に身近な所で私は実は知っている、と思った。たとえば、「どうかな?」「いいんじゃない?」「じゃ行ってくる」「うん楽しみに待ってる」などなど…。

日がな一日、頭が上がらないフリをして大方の

仕事を女衆に任せ、お茶を飲んではおしゃべりしているように見えるトルコの男たちが、祭りの準備など、まさにここぞというときには、わらわらと集い来てかけ声をかけ合い、見事な呼吸と腕っ節の強さとで着実に仕事をこなしていく姿の格好良さに、私は見とれた。

もちろんトルコにおいても、自身の力の及ばないところで成り立っている多くのことに対して、あまり深追いしない・したくないというような、しかしなぜかあまり悲壮感のない諦念は、確かに見え隠れした。また、従順に「エヴェット（はい）」を連発する子どもたちが、学校や社会制度といった、えてして初めに結論ありきのような油断ならぬ作為を前に、内なる青空を濁すような可能性がそこかしこにあるようにも思える。

それでもなお必要なのは、事あるごとに声をかけ合うことと、呼吸を合わせること。そして、その応答性の高さを保つべく常に懇ろに会話をし、お茶を飲むことなのではないか。どこぞに潜んでいるやもしれぬ邪悪さを注意深く拒むべく、大人たちはもっと呼吸を合わせ、もっともっと声をかけ合わなければならないのではないか。

さて、帰国後すぐに受け取った同僚Sさんからのメールに、トルコのお菓子Turkish Delightとは一体何なのか、『ナルニア国ものがたり』を読んだ遙か昔からずっと気になっている、というくだりを見出す。今回タイトルにもしたTurkish Delightとは、字義どおりには「トルコの喜び（楽しみなこと）」であり、その実体はといえば、いかにもさもない菓子である。しかし本当は、何を、その名で呼ぼうとするのか。都市部および地方での具体的なフィールドワーク場面の考察と共に、次号に譲りたいと思う。

（お茶の水女子大学）